

横浜国立大学教育学部の学校インターンシップ科目「スクールデー実践A・B・C」

における2021年度学生の事後調査結果の報告

教職部会 スクールデー実践担当
金光 真理子

1. はじめに

本稿は、本学教育学部2年次の選択必修科目の一つである「スクールデー実践A・B・C」の2021年度(令和3年度)の事後調査結果の報告である。「スクールデー実践A・B・C」は、2018年度に学部教育科目の専門科目の一つとして新設された「学校インターンシップ科目」で、その狙いは学生が1年次の「教育実地研究」で得た学びを、2年次の「スクールデー実践A・B・C」で継続し、続く3年次の「教育実習」へと繋げることにある。

これまでの「スクールデー実践A・B・C」の内容と事後調査については、鬼藤・高芝(2021)、杉山(2022)によって報告されている。2018・2019年度の事後調査では「スクールデー実践A・B・C」による教師力の育成が確認されている一方、新型コロナウイルス感染症の影響で全授業が遠隔で行われた2020年度の事後調査では学びの成果が十分に上がっていなかったことも確認されている。本稿が対象とする2021年度は、社会全体が感染症対策を講じながら活動を継続する方向へシフトし、小中学校と大学もできる限り対面による授業を続けたため、「スクールデー実践A・B・C」を履修する学生は現場で子どもたちと直接関わることができた。コロナ以前とは異なるさまざまな制約の下とはいえ、「スクールデー実践A・B・C」が本来の活動内容へ戻ったことを踏まえ、事後調査の結果をみていく。

2. 「スクールデー実践A・B・C」の内容

「スクールデー実践A・B・C」の内容について、詳細は鬼藤・高芝(2021)に譲り、ここでは概要のみを記す。

「スクールデー実践A・B・C」は、学部2年生を対象とした選択必修科目で、期間は半期(春学期:4月~7月、秋学期:10月~1月)、活動時間帯は金曜日午前中、専門領域を春学期と秋学期で分けて学生が履修する。

スクールデー実践A(教材研究)は、主に大学構内で専

攻ごとにその専門的見地から教材理解・教材開発に取り組む。スクールデー実践B(初等教育フィールドワーク研究)は、スーパーバイザー(退職した元校長、大学が依頼)の指導の下、学生数名のグループが横浜市立小学校に10回程度行き、授業見学・協議等を行う。スクールデー実践C(アシスタント・ティーチャー)は、学生が個人で神奈川県下小中学校に10回程度行き、通常の学校ボランティアと同様、その学校で求められる学習支援に取り組む。

2021年度は、感染症対策による活動の短縮や制限はあったものの、これまでとほぼ同様の内容を実施できた。ただし、学期末の成果報告発表会は、A・B・C合同ではなくA(専門領域ごと)・B・Cで別々に行った。

3. 学生の事後調査の実施

3.1. 対象と方法

調査対象は、横浜国立大学教育学部学校教育課程に在籍する2年生である。「スクールデー実践A・B・C」の事後調査の回答者数を、過去3年間のデータとあわせて表1に示す。

表1 スクールデー実践A・B・Cの回答者数

	年度	2018	2019	2020	2021
A	人数	116	98	77	107
	割合	49.8%	43.2%	44.8%	44.6%
B	人数	46	17	24	42
	割合	19.7%	7.5%	14.0%	17.5%
C	人数	71	112	71	91
	割合	30.5%	49.3%	41.3%	37.9%
合計人数		233	227	172	240

※表中A、B、Cはそれぞれスクールデー実践A、スクールデー実践B、スクールデー実践Cの略(以下同様)。

事後調査は、2020年度から学内のLMS(授業支援システム)を通じて、Microsoft Formsで作成したアンケートを実施している。2021年度は244名が受講し、2022年2~3月に実施したアンケートに240名が回答した。

なお、自由記述以外の項目の回答率は100%である。

事後調査の内容は、過去との比較のため同じとし、選択肢で回答する20項目と学期末の報告会について自由記述で回答する1項目とで構成される。質問項目の内容、選択肢については表2～21に示す。自由記述の結果はここでは割愛する。

3.2 集計結果

3.2.1 子どもと関わるボランティア経験の有無

子どもと関わるボランティアの経験がある学生の人数と割合を表2に示す。選択肢は「あり」と「なし」であり、「あり」を回答した人数を示した。

表2から、2021年度の「学生ボランティアの学習支援の経験」と「宿泊体験学習補助の経験」の割合は、2019年度に増加傾向にあったにもかかわらず減少した2020年度からさらに減少した。一方、「わくわくサタデーやがやっこ探検隊の経験」の割合は、2020年度からやや増加した。「上記以外の、子どもと関わったボランティアの経験」の割合は、2019・2020年度は5割に近かったが、2021年度は3割台まで減少した。

2021年度は、2020年度に引き続き、コロナ禍において学校側が大学生によるボランティア活動の受け入れを制限していたことが背景にあると考えられる。とくに宿泊体験学習補助は、宿泊を伴う体験学習自体が中止や規模の縮小を余儀なくされ、補助の学生ボランティアも必要とされなかったことが、大幅な数値の減少に現れていると思われる。対象学生は大学1年次の全授業を大学に来ることなくオンラインで受講しており、2020年度までの学生と比べてさらに子どもと直接関わるボランティアの機会が減ったことが伺える。

3.2.2 教職志望度合

スクールデー実践受講後の学生の教職志望度合を表3に示す。これ以降は、2018～2020年度のデータの掲載は省略するので適宜既報のデータを確認してほしい。

表3から、学生の教職志望度合について、2021年度の学生合計では「1.とてもそう思う」は28.3%、「2.ややそう思う」が33.3%で、合計すると61.6%で6割以上の学生が教職を志望していた。教職志望の割合は2018年度(57.1%)から2019年度(67.8%)で10%増加したものの、2020年度(62.7%)からやや減少している。A・B・Cを個別に見ると、Aは44.9%、Bは81.0%、Cは73.7%となっており、教職を志望する割合がB>C>Aという傾向は、2018年度から変わっていない。2020年度と比較

表2 子どもと関わるボランティアの経験がある学生の人数と割合

	年度	2018	2019	2020	2021
学生ボランティアの学習支援の経験について	A	15	20	23	19
		12.9%	20.4%	29.9%	17.8%
	B	24	7	7	19
		52.2%	41.2%	29.2%	45.2%
	C	24	63	28	38
		33.8%	56.3%	39.4%	41.8%
合計	63	90	58	76	
		27.0%	39.6%	33.7%	31.6%
宿泊体験学習補助の経験について	A	18	26	16	8
		15.5%	26.5%	20.8%	7.5%
	B	21	10	7	10
		45.7%	58.8%	29.2%	23.8%
	C	19	36	18	19
		26.8%	32.1%	25.4%	20.9%
合計	58	72	41	37	
		24.9%	31.7%	23.8%	15.4%
わくわくサタデーやがやっこ探検隊の経験について	A	12	14	9	14
		10.3%	14.3%	11.7%	13.1%
	B	15	3	11	16
		32.6%	17.6%	45.8%	38.1%
	C	15	19	12	19
		21.1%	17.0%	16.9%	20.9%
合計	42	36	32	49	
		18.0%	15.9%	18.6%	20.4%
上記以外の、子どもと関わったボランティアの経験について	A	30	39	34	34
		25.9%	39.8%	44.2%	31.8%
	B	19	12	11	15
		41.3%	70.6%	45.8%	35.7%
	C	20	52	33	32
		28.2%	46.4%	46.5%	35.9%
合計	69	103	78	81	
		29.6%	45.4%	45.3%	33.8%

※ 各年度のA、B、Cの人数は表1を参照

すると、Aは5.8%減少、Bは6.5%減少、Cは6.1%上昇していた。

一方、「4.あまりそう思わない」は15.8%、「5.全くそう思わない」が6.3%であり、合計すると22.1%で約2割の学生が教職を志望していなかった。2018年度の18.0%、2019年度の15.9%と比べて2020年度は26.8%と増えていたが、それより少し減っている。A・B・Cを個別に見ると、Aは39.2%、Bは11.9%、Cは6.6%であった。2020年度はAとCの割合が増えていたが、2021年度は

学校インターンシップ科目「スクールデー実践A・B・C」における2021年度学生の事後調査結果報告

Cが2020年度の21.1%から6.6%へと大幅に減り、2018年来でもっとも数値が低く、教職志望の学生の増加と反比例している。

教職を志望する割合が6割を保ったものの、志望しない割合がコロナ禍以前まで戻らなかったのは、A・B・Cいずれも学外活動の制限が要因として考えられる。Aは領域ごとに大学内の活動だけでなく学校現場を含めた学外活動を組み入れてきたが、それがいまだできなかったケースも多く、Bは従来通り横浜市小学校で活動できたものの感染症の状況に応じて活動が制限された。その中でCの教職志望の割合がAやBと異なり増加したことは注目に値する。Cは各学生が神奈川県下の小中学校において学校ボランティアとして学習支援に取り組むが、大学1年次に全授業をオンラインで受講した学生にとって、Cの学校ボランティアの活動は大学生として初めて子どもたちと触れあい、主体的に学ぶことができる機会となった。学校現場での実践的な活動が教職志望へとポジティブに働いたのではないかと考えられる。

次に、学生が教員就職で希望する学校種を表4に示す。学生合計では、「1.小学校」を希望する学生が最も多く

38.3%、次いで「2.中学校」の23.3%、「3.高校」の22.1%であった。小学校の割合は2018年度の34.3%、2019年度の41.4%、2020年度の34.3%と比べて比較的高く、中学校の割合は2018年度の14.2%、2019年度の22.9%、2020年度の26.2%とほぼ変わらず、「3.高校」と「4.特別支援学校」の割合も2020年度とほぼ変わらない。

A・B・Cを個別に見ると、Aの学生の希望する学校種はこれまで小学校>高校>中学校の順であったが、小学校が2020年度39.0%から2021年度23.4%へと大幅に減った一方、中学校は12.2%から22.4%へ、高校は17.3%から28.0%へと大幅に増えていた。Bの学生は2019年までの傾向に戻り、小学校希望が57.1%と最も高く(2018年度78.3%、2019年度52.9%、2020年度33.3%)、2020年度に一時的に増えた高校希望は9.5%に減った。CもBと同様これまでの割合に近く、小学校希望は47.3%と最も高く、中学校23.1%と高校20.9%はほぼ等しかった。

一方、「6.教員志望ではない」が学生全体で11.3%あり、2018年度8.2%、2019年度4.0%から増えた2022年度12.8%とほぼ変わらない。これは、表3で教職を志望しない学生の割合が2020年度から微減であった結果と

表3 スクールデー実践A・B・Cの事後調査における学生の教職志望度合
(「大学卒業後に教員として就職したいと思いますか」の集計結果)

	1.とてもそう思う	2.ややそう思う	3.どちらでもない	4.あまりそう思わない	5.全くそう思わない
A N=107	15 14.0%	32 29.9%	18 16.8%	29 27.1%	13 12.1%
B N=42	22 52.4%	12 28.6%	3 7.1%	4 9.5%	1 2.4%
C N=91	31 34.1%	36 39.6%	18 19.8%	5 5.5%	1 1.1%
合計 N=240	68 28.3%	80 33.3%	39 16.3%	38 15.8%	15 6.3%

表4 スクールデー実践A・B・Cの事後調査における学生が教員就職で希望する学校種
(「教員として就職する場合、どの学校種を考えていますか」の集計結果)

	1.小学校	2.中学校	3.高校	4.特別支援学校	5.その他	6.教員志望ではない
A N=107	25 23.4%	24 22.4%	30 28.0%	3 2.8%	2 1.9%	23 21.5%
B N=42	24 57.1%	11 26.2%	4 9.5%	1 2.4%	1 2.4%	1 2.4%
C N=91	43 47.3%	21 23.1%	19 20.9%	2 2.2%	3 3.3%	3 3.3%
合計 N=240	92 38.3%	56 23.3%	53 22.1%	6 2.5%	6 2.5%	27 11.3%

※ 「5.その他」の内容は、「未定」「迷っている」「小学校か特別支援学校で迷っている」「中高一貫校」等。

合致している。引き続きコロナ禍の影響を受けている学生として、2020年度の学生とあわせて今後の教職志望の変化に注目したい。

3.2.3. スクールデー実践の評価

「スクールデー実践の評価」に関する9項目の集計結果を表5～13に示す。なお、本節以降で扱う17項目については、順序をランダム化して配置し、黙従傾向を抑制するようにした。A、B、C間での比較と共に、コロナ禍前の2019年度、オンライン化した2020年度との比較を行う。

表5によると、スクールデー実践の活動が充実していたかについて、「1.とてもそう思う」と回答した割合はBが最も高く71.4%、次いでCが63.7%で、Aは40.2%で「2.ややそう思う」とほぼ同じ割合であった。「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算すると、Aは83.2%、Bは100%、Cは96.7%と8割以上の学生が肯定的な回答をしていた。2020年度はCのみが前年度よりも肯定的な回答が減少していたが、コロナ禍前の9割台に戻っていた。

表6は、スクールデー実践の経験を教育実習に結び付けられるかどうかについての結果を示している。表5の結果よりも「1.とてもそう思う」と回答する学生の割合がA・Bは微減しているが、Cは63.7%から75.8%へと1割増加している。「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算すると、Aは79.5%、Bは97.6%、Cは97.8%といずれも高い割合で、多くの学生が教育実習に結びつけることができると感じていた。もっとも、Aの経年変化を見ると、2019年度83.6%→2020年度83.1%→2021年度79.5%と徐々に下がっている。BとCは学校現場での活動が学生に次年度の実習に向けた自信を与えているとすれば、Aも可能な範囲で学校現場での活動を組み込むことが望ましいと考えられる。

表7は、活動の目標を理解していたかどうかについて、「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算すると、Aは78.5%、Bは92.9%、Cは92.4%でAの割合が低かった。2019年からの変化を見ると、Aは81.6%→84.5%→78.5%、Bは100%→91.7%→92.9%、84.9%→67.6%→92.4%で、Cは一時的に減少していた割合に戻ったが、Aが減少傾向にある。

表8は、1年次の「教育実地研究」での学びを進展させられたかどうかについて、「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算するとAは60.8%、Bは

表5 「あなたにとってスクールデー実践の活動は充実していましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	43	46	14	4	0
N=107	40.2%	43.0%	13.1%	3.7%	0.0%
B	30	12	0	0	0
N=42	71.4%	28.6%	0.0%	0.0%	0.0%
C	58	30	1	2	0
N=91	63.7%	33.0%	1.1%	2.2%	0.0%
合計	131	88	15	6	0
N=240	54.6%	36.7%	6.3%	2.5%	0.0%

表6 「スクールデー実践の経験を教育実習に結び付けられそうですか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	40	45	16	6	0
N=107	37.4%	42.1%	15.0%	5.6%	0.0%
B	29	12	1	0	0
N=42	69.0%	28.6%	2.4%	0.0%	0.0%
C	69	20	1	1	0
N=91	75.8%	22.0%	1.1%	1.1%	0.0%
合計	138	77	18	7	0
N=240	57.5%	32.1%	7.5%	2.9%	0.0%

表7 「あなたが選んだスクールデー実践の活動が目標としていたことを理解していましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	27	57	16	7	0
N=77	25.2%	53.3%	15.0%	6.5%	0.0%
B	13	26	2	1	0
N=24	31.0%	61.9%	4.8%	2.4%	0.0%
C	40	44	6	1	0
N=71	44.0%	48.4%	6.6%	1.1%	0.0%
合計	80	127	24	9	0
N=172	33.3%	52.9%	10.0%	3.8%	0.0%

学校インターンシップ科目「スクールデー実践A・B・C」における2021年度学生の事後調査結果報告

66.7%、Cは71.5%であった。2019年度からの変化を見ると、Aは66.3%→63.7%→60.8%、Bは82.4%→83.3%→66.7%、Cは75.9%→54.9%→71.5%であった。Cは前年度より増加し、以前の割合に戻ったものの、AとくにBは大きく減少しており、コロナ禍の1年次の教育実地研究から学びに影響が始まっていることが判る。

表9は、理解が滞ることがなかったかどうかについて、「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の割合を合わせると、Aは69.2%、Bは80.9%、C74.8%で、いずれも7～8割の学生は理解が滞ることなく活動ができていた。また、2019年度(58.8%～67.9%)、2020年度(69.1%～79.3%)、2021年度(69.2%～80.9%)と比べても、学生の学びが徐々にスムーズに展開していることが確認できた。

これらの結果から、スクールデー実践を履修した8割以上の学生が充実した取り組みができ、教育実習に結び付けられると感じ、目標を理解して活動していたことが確認できた。また、半数以上の学生が1年次の学びを進展させることができ、7割～8割の学生が活動過程において理解が滞ることがなかったことが確認でき、全体としてはこれまでと同様に順調に実施できていることが判った。A・B・Cを比較すると、Bはこれまでと同様に肯定的な回答をした学生の割合が高く、Cは前年度(2020年度)に肯定的な回答をした学生の割合が下がっていたが、ふたたび高くなった。

2019年度からの経年変化を見ると、オンライン化によって活動形態が大きく変化した2020年度と異なり、2021年度は2019年度とほぼ同様の割合に戻っているものの、コロナ禍の影響が続いていることを感じさせる。学校現場での活動を再開できたBとCは5項目いずれにおいても肯定的な回答が高い割合を占めているが、Bでは1年次の学びを進展させることができた学生が前年度から16.6%減少していた(83.3%→66.7%)。1年次の学びがオンライン化した結果、2年次のスクールデー実践への繋がりを実感できなかったことが予測できる。Aでも7割近い学生は理解が滞ることなく活動できていたにもかかわらず、1年次の学びの発展と3年次の教育実習への結び付けとを肯定的に回答する割合が少しずつ下がっており、今後の動向を見守る必要がある。

表10及び表11は、スクールデー実践A・B・Cの前年度の説明会や第1回授業のオリエンテーションについて、分かりやすかったかどうかの集計結果である。「1.と

表8 「教育実地研究(1年秋学期)で得た課題意識(出来なかったことを補いたい、見つかったやりたいことをもっとやりたい、分からなかったことを知りたい)について、スクールデー実践の活動で取り組むことができましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	17	48	28	12	2
N=107	15.9%	44.9%	26.2%	11.2%	1.9%
B	7	21	7	6	1
N=42	16.7%	50.0%	16.7%	14.3%	2.4%
C	24	41	12	13	1
N=91	26.4%	45.1%	13.2%	14.3%	1.1%
合計	48	110	47	31	4
N=240	20.0%	45.8%	19.6%	12.9%	1.7%

表9 「あなたが選んだスクールデー実践の過程においての理解が滞ることはなかったですか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	29	45	22	11	0
N=107	27.1%	42.1%	20.6%	10.3%	0.0%
B	10	24	3	4	1
N=42	23.8%	57.1%	7.1%	9.5%	2.4%
C	28	40	13	9	1
N=91	30.8%	44.0%	14.3%	9.9%	1.1%
合計	67	109	38	24	2
N=240	27.9%	45.4%	15.8%	10.0%	0.8%

表10 「A～C選択前の前年度10月にあった説明会について分かりやすかったですか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	16	33	37	20	1
N=107	15.0%	30.8%	34.6%	18.7%	0.9%
B	5	17	6	13	1
N=42	11.9%	40.5%	14.3%	31.0%	2.4%
C	15	38	22	16	0
N=91	16.5%	41.8%	24.2%	17.6%	0.0%
合計	36	88	65	49	2
N=240	15.0%	36.7%	27.1%	20.4%	0.8%

てもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答の割合を合算すると、前年度に行われる説明会は45.8%～58.3%、初回のオリエンテーションは76.9%～88.1%であった。前年度の説明会の肯定的な回答は2020年度よりもやや下がっているが、初回のオリエンテーションはほぼ同じであった。

表12は、スクールデー実践の活動に対する学生の疲労感についての集計結果である。Aでは「4.あまりそう思わない」と回答した学生が最も多く、BやCでは、「2.ややそう思う」と回答した学生が最も多かった。「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算して、2019年度からの経年変化を見て見ると、Aは39.8%→31.2%→40.1%、Bは70.6%→54.2%→57.1%、Cは71.4%→54.9%→70.4%であった。疲労感を感じる学生の割合が、Bは前年度から微増に留まり、Cが増加して2019年度と同じ割合に戻ったのは、活動の再開の度合いに比例していると考えられる。

表13は、スクールデー実践を通して教師になりたい気持ちが増したかどうかについての集計結果である。「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算すると、Aは28.0%、Bは76.2%、Cは56.1%で、Bの学生の割合が最も高かった。ただし、2019年度からの経年変化を見ると、Aは33.6%→40.3%→28.0%、Bは82.4%→83.3%→76.2%、Cは51.8%→46.5%→56.1%で、Aは大幅に減少し、Bもやや減少した一方、Cは増加して過去4年間で最も高くなっている。この結果は、スクールデー実践の内容を教職カリキュラムの一つとして精査する上で有益なデータとなるだろう。

3.2.4. 教師に求められる資質

表14～19は、教師に求められる資質に関する項目の集計結果を示している。「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算して見ると、「組織の方針やきまりを理解し、その一員として活動できたか」（表14）については62.7～94.5%で、一時的に減少した2020年度（61.1～69.0%）から増加し、とくにCが2019年度から1割増加した（85.7%→94.5%）。「教職員等に挨拶できたか」（表15）について、Aは38.3%、Bは100%、Cは95.6%で、一時的に減少した2020年度（19.5%～31.0%）から増加しているが、Aのみが2019年度（74.5%）から大幅に減少したままで、学外で活動できなかった実態が伺える。

「先生や友人からのアドバイスに耳を傾けられたか」

表11 「あなたが選択した活動の第1回目授業のオリエンテーションは分かりやすかったですか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	45	40	19	2	1
N=107	42.1%	37.4%	17.8%	1.9%	0.9%
B	13	24	3	2	0
N=42	31.0%	57.1%	7.1%	4.8%	0.0%
C	21	49	16	5	0
N=91	23.1%	53.8%	17.6%	5.5%	0.0%
合計	79	113	38	9	1
N=240	32.9%	47.1%	15.8%	3.8%	0.4%

表12 「あなたにとってスクールデー実践の活動は疲労感の残るものでしたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	10	33	23	31	10
N=107	9.3%	30.8%	21.5%	29.0%	9.3%
B	3	21	10	7	1
N=42	7.1%	50.0%	23.8%	16.7%	2.4%
C	25	39	10	15	2
N=91	27.5%	42.9%	11.0%	16.5%	2.2%
合計	38	93	43	53	13
N=240	15.8%	38.8%	17.9%	22.1%	5.4%

表13 「スクールデー実践を通じて、教師になりたい気持ちは増しましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	13	17	51	17	9
N=107	12.1%	15.9%	47.7%	15.9%	8.4%
B	19	13	8	1	1
N=42	45.2%	31.0%	19.0%	2.4%	2.4%
C	16	35	24	14	2
N=91	17.6%	38.5%	26.4%	15.4%	2.2%
合計	48	65	83	32	12
N=240	20.0%	27.1%	34.6%	13.3%	5.0%

(表16)については、78.5～95.6%と多くの学生が肯定的に回答しており、Aがやや減少しているものの、2019年度(86.7%～100%)、2020年度(84.5%～95.8%)とほぼ同様の結果が得られた。「改善点を自覚しどうすれば良くなるか考えたか」(表17)についても、76.7%～95.3%と多くの学生が肯定的に回答しており、2020年度(69.0%～83.3%)に大きく下がっていたが、2019年度(83.1%～91.4%)とほぼ同じ割合に戻った。また、「学び続ける姿勢を身に付けられたか」(表18)についても75.7～92.8%で、2020年度(77.5～100%)とほぼ同様に約8割が肯定的な回答をしていた。また、「時間やものを活用する力は身についたか」(表19)については、71.9～80.9%とA・B・Cの差は小さく、2019年度(80.6～94.1%)から2020年度(62.0%～66.7%)に大きく減少していたが、ふたたび増加した。

以上のことから、2021年度のスクールデー実践を通して学生は教師に求められる資質として設定した6項目のいずれもおおむね養うことができ、2019年度以前と同様の成果をあげることができたと考えられる。しかし、とくに学外活動ができなかったAでは、教職員・保護者・地域の方々とコミュニケーションを経験する機会を欠いたため、3年次の教育実習に向けた大学のサポート体制が必要であろう。

3.2.5. 子どもへの指導

表20及び表21は「子どもへの指導」に関する項目の集計結果を示している。「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算して見ると、「教職への情熱、児童生徒への愛情を持てたか」について、Aは36.5%、Bは92.9%、Cは89%で、大きく減少した2020年度(29.9%、45.8%、43.6%)と比べると増加したが、2019年度(59.2%、94.1%、90.2%)と比べると、Aだけが5割に達しておらず、コロナ禍の影響が伺える。また、「声の大きさ、板書など基本的な指導技術を知れたか」について、Aは44.8%、Bは88.1%、Cは78.1%で、2020年度(35.1%、66.6%、63.4%)と比べると増加し、2019年度(55.1%、94.1%、74.1%)の割合に近い。

「子どもへの指導」に関して、BとCはAよりも学びが多いことがこれまでも確認されてきたが、2020年度はオンライン化によって学びの質が変化したものの、ふたたび学校現場での経験を通して実践的な学びができていたことが判る。

表14 「それぞれの組織の方針やきまりを理解し、その一員として活動することはできましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	16	51	27	10	3
N=107	15.0%	47.7%	25.2%	9.3%	2.8%
B	17	20	4	1	0
N=42	40.5%	47.6%	9.5%	2.4%	0.0%
C	34	52	5	0	0
N=91	37.4%	57.1%	5.5%	0.0%	0.0%
合計	67	123	36	11	3
N=240	27.9%	51.3%	15.0%	4.6%	1.3%

表15 「教職員、保護者や地域の方々に挨拶ができましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	15	26	48	6	12
N=107	14.0%	24.3%	44.9%	5.6%	11.2%
B	28	14	0	0	0
N=42	66.7%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%
C	69	18	3	1	0
N=91	75.8%	19.8%	3.3%	1.1%	0.0%
合計	112	58	51	7	12
N=240	46.7%	24.2%	21.3%	2.9%	5.0%

表16 「先生(教員、SVなど)や友人からのアドバイスに耳を傾け、自らを改善しようとしたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	41	43	18	4	1
N=107	38.3%	40.2%	16.8%	3.7%	0.9%
B	29	10	3	0	0
N=42	69.0%	23.8%	7.1%	0.0%	0.0%
C	53	34	4	0	0
N=91	58.2%	37.4%	4.4%	0.0%	0.0%
合計	123	87	25	4	1
N=240	51.3%	36.3%	10.4%	1.7%	0.4%

学校インターンシップ科目「スクールデー実践A・B・C」における2021年度学生の事後調査結果報告

表 17 「各回の活動後、自らが改善点を自覚し、どうすれば良くなるかを考えることができましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	19	63	16	7	2
N=107	17.8%	58.9%	15.0%	6.5%	1.9%
B	18	22	2	0	0
N=42	42.9%	52.4%	4.8%	0.0%	0.0%
C	39	42	10	0	0
N=91	42.9%	46.2%	11.0%	0.0%	0.0%
合計	76	127	28	7	2
N=240	31.7%	52.9%	11.7%	2.9%	0.8%

表 18 「常に向上しようという前向きな気持ちで、学び続ける姿勢を身に付けられましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	27	54	19	5	2
N=107	25.2%	50.5%	17.8%	4.7%	1.9%
B	24	15	3	0	0
N=42	57.1%	35.7%	7.1%	0.0%	0.0%
C	42	37	9	3	0
N=91	46.2%	40.7%	9.9%	3.3%	0.0%
合計	93	106	31	8	2
N=240	38.8%	44.2%	12.9%	3.3%	0.8%

4. おわりに

本稿では横浜国立大学教育学部「スクールデー実践A・B・C」の授業の2021年度の事後調査を通して、学生の「子どもと関わるボランティア経験」、「教職志望度合」、「スクールデー実践の評価」、「教師に求められる資質」、「子どもへの指導」に関する回答結果を報告した。高い教師力の育成を目的として2018年度から実施されてきた「スクールデー実践A・B・C」は、これまで一定の成果をあげてきたと考えられるが、新型コロナウイルス感染症によって学校現場でまったく活動できなかった2020年度に学びの質は大きく変わらざるをえず、そして学校現場での活動が再開した2021年度もまだ学びへの影響は続いて

表 19 「時間やものなどを効果的に活用する力は身につきましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	18	59	21	8	1
N=107	16.8%	55.1%	19.6%	7.5%	0.9%
B	8	26	5	3	0
N=42	19.0%	61.9%	11.9%	7.1%	0.0%
C	31	38	14	7	1
N=91	34.1%	41.8%	15.4%	7.7%	1.1%
合計	57	123	40	18	2
N=240	23.8%	51.3%	16.7%	7.5%	0.8%

表 20 「教職を目指す情熱を持ち、児童生徒に愛情をもって接することができましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	14	25	53	7	8
N=107	13.1%	23.4%	49.5%	6.5%	7.5%
B	23	16	2	0	1
N=42	54.8%	38.1%	4.8%	0.0%	2.4%
C	47	34	8	1	1
N=91	51.6%	37.4%	8.8%	1.1%	1.1%
合計	84	75	63	8	10
N=240	35.0%	31.3%	26.3%	3.3%	4.2%

表 21 「声の大きさ、立ち位置、板書や発問の仕方等の基本的な指導技術を知ることができましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	13	35	36	11	12
N=107	12.1%	32.7%	33.6%	10.3%	11.2%
B	20	17	2	3	0
N=42	47.6%	40.5%	4.8%	7.1%	0.0%
C	31	40	10	7	3
N=91	34.1%	44.0%	11.0%	7.7%	3.3%
合計	64	92	48	21	15
N=240	26.7%	38.3%	20.0%	8.8%	6.3%

学校インターンシップ科目「スクールデー実践A・B・C」における2021年度学生の事後調査結果報告

いることが明らかになった。とくに「子どもと関わるボランティア経験」と「教職志望度合」の割合のさらなる減少は憂慮される。ただし、その内訳を見ると、学校現場で主体的に活動できたCの学生はむしろ肯定的な回答が増えていることから、子どもと関わる実践的な活動が学生の教職への興味・関心や学ぶ意欲へとつながる可能性があらためて示唆された。

なお、次年度（2022年度）のスクールデー実践を履修する2年生は、組織改編によって新設された学校教員養成課程（定員200名）の学生である。新課程では定員が30名減り、入試制度の変更により入学時点で特定の専門領域への所属が決定している学生が大幅に増える（尾島・軍司2022）。2021年度までのスクールデー実践の調査結果と比較しながら、次年度以降の調査結果を分析し、より有機的なスクールデー実践のあり方を探っていきたい。

参考文献

- 鬼藤明仁・高芝麻子（2021）学校インターンシップ科目「スクールデー実践A・B・C」における2018・2019年度学生の事後調査結果報告. 教育デザイン研究, 12(2), 104-113.
- 杉山久仁子（2022）学校インターンシップ科目『スクールデー実践A・B・C』における2020年度学生の事後調査結果報告. 教育デザイン研究, 13(2), 65-72.
- 尾島司郎・軍司敦子（2022）2020年度学校教育課程在籍者・2021年度学校教員養成課程入学生への進路意識調査結果の報告. 教育デザイン研究, 13(2), 44-54.